

## 窓 明

一九二五(大正十四)年九月、旧制松江高校のドイツ語教師として、妻とともに松江にやって

来たフリッツ・カルシュ博士(一八九三—一九七一年)は宍道湖の夕景に見入った。「きれいな夕映えだ。当分の間は、ここで暮らすのだな。良い思い出をつくろう」▼東京医科歯科大学院教授の若松秀俊さんが最近刊行した『湖畔の夕映え カルシュ博士と松江』(文芸社)にこんなシーンが出てくる。若松さんは九九年、出張先のドイツで全く偶然に、博士の二女と知り合った。それがかきっかけで博士の事績を調べるようになり、出版にこぎ着けた▼カルシュ博士は温厚で親切な先生だった。哲学で博士号を取得しており、「一つのもの以外のものを滅亡させるようなことにならず共存している」日本に興味を持ち来日した、と

いう。三九年に松高を退任後、東京のドイツ大使館に外交官として勤務もした▼博士が松高同窓会の招きで六八年に松江を再訪したのは、学生に好かれていたことをうかがわせるエピソードだ。島根大で講演したり、松江時代の宿舎の近所にあった万寿寺や出雲大社を訪れた。松江の町が古いものを守りながら発展していることに感激した▼若松さんの本の中には、博士に関連した当時の懐かしい写真や、博士が松江時代に描いたパステル画が収められている。題材は宍道湖の嫁ヶ島や袖師地蔵、枕木山から中海を経て望んだ大山などだ。遺品の中には当時の松江市民の日常生活を描いたスケッチも多数あるという▼カルシュ博士が住んだ洋風の官舎は、今も奥谷町に残っている。若松さんはそこをカルシュ記念館として保存することを提言している。(康)